

令和 2 年 5 月 21 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01540

研究課題名(和文) 認知症の方の快適な身体活動と介護者の負担軽減につながる動作誘導・介助法を提案する

研究課題名(英文) Approach for supporting execution of comfortable physical activity in clients with dementia and reducing burden on caregivers

研究代表者

横川 正美 (Yokogawa, Masami)

金沢大学・保健学系・准教授

研究者番号：80303288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：理学療法士が認知症高齢者(クライアント)にどのように関わり、理学療法を提供しているのかを治療場面の観察とインタビューから検討した。理学療法士は身体機能と認知機能の問題によってクライアントの日常生活の動きが障害されていることに対応していた。なじみある活動を見つけ、それらを理学療法プログラムに取り入れていた。声がけなどによって、クライアントの動きを引き出しながら運動や動作練習を行い、検査だけでなく、日常会話で質問をすることによってもクライアントの認知機能を確認し、安全な日常生活の獲得を支援していた。信頼関係を築く上で、クライアントにとって嫌な記憶を緩和することを常に考慮して関わっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者への適切な動作の誘導・介助は快適な身体活動を促し、身体機能及び認知機能維持にもつながる。理学療法士は起きる、座る、立つ、歩くなど、日常生活の基本的な動作を維持・改善するための働きかけを得意とし、これによって身体機能の維持改善を図る。認知症の症状は多彩であり、認知症高齢者に対するケアは複雑な側面を持つとされる。本邦において認知症に対する理学療法介入は必ずしも一般的ではなく、認知症高齢者のニーズに対処するための情報が十分共有されるまでには至っていない。本研究の成果は認知症高齢者に対して理学療法を提供する時の一助となり、認知症高齢者の生活機能維持とその介護者の支援に役立つと考える。

研究成果の概要(英文)：This study examined the interactions between physical therapists and clients with dementia by participants observation and interview. The physical therapists' care was directed toward improving her client's impaired activities of daily living caused by problems related to physical and cognitive function. The physical therapists looked for and introduced activities that the client was familiar with into the physical therapy program. The physical therapists also used various means to induce her client's movement such as verbal cues. The physical therapists assessed clients' cognitive function not only by tests, but also through casual conversation, in hopes to alleviate negative emotions and foster a relationship built on trust.

研究分野：理学療法学

キーワード：認知症 理学療法士 動作介助・誘導

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

我が国では高齢人口の急速な増加に伴い、認知症高齢者も急増している。現在までのところ、アルツハイマー病をはじめとする認知症の原因疾患に対する根本的な治療法は確立に至っておらず、認知症高齢者への対応は喫緊の課題である。従来、認知症介護は病院や施設の利用が一般的と考えられてきたが、国の施策は「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域、環境で暮らし続ける」方向へと、その流れを変えつつある。

認知症は環境が変わることで症状が悪化すると言われており、昔からのなじみある習慣、環境を保つことのできる意味でも住み慣れた地域で暮らす意義は大きい。認知症は記憶障害、視空間認知障害、遂行機能障害、言語障害といった中核症状に、行動・心理症状(BPSD)と呼ばれる妄想、徘徊、興奮、暴言などの症状が加わることがある。認知症高齢者が在宅生活を送る上で介護者の役割は大きい。しかし、介護者は認知症高齢者の BPSD 発症モデルの一因子でもある。

理学療法士は起きる、座る、立ち上がる、歩くなど、基本的な動作の維持・改善の働きかけを得意としている。これによって対象者の動作の習得と身体機能の維持改善を図り、必要に応じて介護者にアドバイスを行う。理学療法士による運動介入は、認知症ケアにおいて日常生活動作の低下予防効果が示されている。加えて、運動が認知症の方の認知機能改善あるいは、その進行をより緩徐にする可能性を示唆する報告もある。通常、理学療法士の治療は個別である。理学療法士が認知症高齢者にどのように関わり、理学療法を提供するのかについて言語化できる内容を集約し、要素を抽出することにより、認知症高齢者の身体機能維持に理学療法士がこれまで以上に貢献できる、あるいは、認知症高齢者に適した動作の誘導・介助方法を介護者と共有できるのではないかと考え、本研究を計画した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者の身体機能、生活機能維持や介護負担軽減につながる提案をするため、理学療法士が認知症高齢者にどのように関わり、理学療法を提供するのかについて、経過を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

北陸地方において認知症高齢者の対応経験が豊富な理学療法士に研究への協力を依頼し、理学療法士 5 名に対する調査として、デイケアにおける理学療法士による認知症高齢者の治療場面の観察・録画と理学療法士へのインタビューを行い、質的記述的方法により分析した。本研究は所属施設の倫理審査委員会の承認を得て行い、デイケア施設、理学療法士、認知症高齢者(クライアント)またはクライアントのご家族に研究の内容を説明し、同意の得られた場合に調査を行った。参加者はいつでも自由に研究への協力をやめることができ、参加者が話した内容に関する守秘性および匿名性が保証された。

理学療法士がクライアントに行う理学療法の内容を把握し、インタビューにおいて話す背景を知るために研究代表者は理学療法場面を観察した。インタビューを促すため、オープンクエスチョンで行う半構造化したインタビューガイドを作成し、用いた。理学療法士は自身の録画画像を視聴しながら、クライアントに行った理学療法プログラムおよびその背景、それぞれの場面で判断したこと、その他を自由に話した。インタビューを IC レコーダーに録音した。

録音したインタビューの逐語録を作成し、理学療法士の対応、その時の考えを抽出し、質的記述的に分析を行った。データ分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)\* を用いた。M-GTA はデータに密着した分析から独自の理論構築をめざすもので、インタビューデータから対象者の主観的体験を明らかにする本研究の分析には M-GTA が適していると判断した。分析テーマを「理学療法士は認知症高齢者にどのように関わり、理学療法を提供するのか」とした。

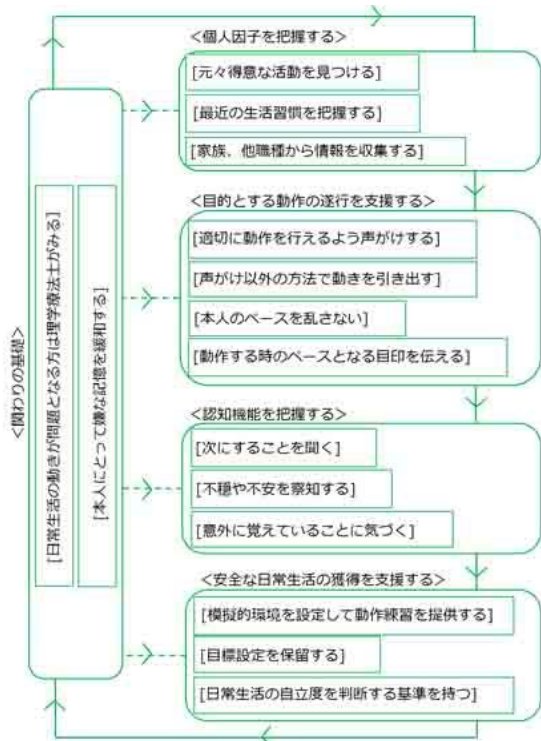
分析は M-GTA の方法に基づき、1) 逐語化したデータから分析ワークシートを用いて概念を生成した。分析ワークシートは概念名、概念の定義、具体例(ヴァリエーション)および理論メモの項目から構成される。2) ヴァリエーションは分析テーマに関連すると考えられる箇所をデータから抽出し、ワークシートに記入した。他の類似したヴァリエーションをも説明できると考えられる言葉を概念名として抽出して記入した。3) データ分析する中で新たな概念が抽出された場合は、新たに分析ワークシートを設けた。4) 並行してデータからそれぞれの概念に含まれる別のヴァリエーションを探し、分析ワークシートに追加記入していった。5) 抽出された概念からカテゴリーを形成してカテゴリー間の関係性を検討し、結果図とストーリーラインを作成した。分析は研究代表者、研究分担者および研究協力者の 3 名で行った。研究分担者は質的研究の多くの経験を有し、データ分析と同時にスーパービジョンにも関与した。質的研究における信頼性を増加させるために、結果を研究者間で繰り返し検討し、インタビューを行った理学療法士のメンバーチェックを受けた。

研究代表者がこのテーマに取り組んだのが初めてであったため、まず、理学療法士へのインタビューから多くの概念を生成することを目指した。そこで、最初にインタビューした 1 名のデータを検討することとした。当該理学療法士は多くの具体例を含んだ豊富なデータを提供した。

\*木下康仁: ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂, 2007.

#### 4. 研究成果

理学療法士が認知症高齢者(クライアント)に関わり、提供している 5 個のカテゴリー、15 個の概念を抽出した。カテゴリーを<>、概念を[ ]で示した。



結果図はカテゴリー同士を実線でつなぎ、矢印で理学療法の進む方向を示した(図 1)。矢印の方向は理学療法 1 回の流れを示す。対象者はクライアントの状態や経過、時間的制約など、その時々状況に適した概念から関わりを開始することがある。その場合、ある日の理学療法は結果図の点線からクライアントへの関わりを開始する(図 1)。つまり、図は理学療法の経過を示していると捉えることもできる。1 回の理学療法ですべての概念が必ず行われるわけではなく、回数を重ねることによってクライアントに対する理学療法士の関わりが網羅されていく。カテゴリーは<関わりの基礎>、<個人因子を把握する>、<目的とする動作の遂行を支援する>、<認知機能を把握する>、<安全な日常生活の獲得を支援する>が生成された。

図 1. 結果図

- (1) <関わりの基礎>として、[日常生活の動きが問題となる方は理学療法士がみる]という考えのもと、クライアントとの信頼関係を築くために[本人にとって嫌な記憶を緩和する]ことを心がけて理学療法を行っていた。すなわち、理学療法士は認知症への対応というよりも身体機能と認知機能の問題によってクライアントの日常生活の動きが障害されていることに対応していた。痛み、不快感、不安など、クライアントにとって嫌な記憶が身体活動に影響していると判断した時にはその記憶が緩和するように関わり、対象者が嫌な記憶を誘発しないよう常に注意して接していた。
- (2) 理学療法士がクライアントの[元々得意な活動を見つける]、[最近の生活習慣を把握する]、[家族、他職種から情報を収集する]ことを通じて、<個人因子を把握>していた。
- (3) 理学療法士は[適切に動作を行えるよう声がけする]、動かす部位に触れる、運動療法を集団で行うなど[声がけ以外の方法で動きを引き出す]ことをしつつ、各種運動や動作練習を提供し、<目的とする動作の遂行を支援>していた。同時に理学療法士は[動作する時のペースとなる目印を伝える]、周囲の人がクライアント[本人のペースを乱さない]ことが大切であると考えていた。
- (4) 理学療法士は日常会話として運動メニュー、予定など[次にすることを聞く]。その回答内容から、クライアントの<認知機能を把握>していた。クライアントの[不穏や不安を察知]することにより、認知機能が悪化する徴候をとらえ、対応しようとしていた。クライアントの記憶力は低下するのみとは限らず、[意外に覚えていることへの気づき]があった。
- (5) 理学療法士は認知症高齢者の[日常生活自立度を判断する基準を持つ]ことにより、目標を設定し、[模擬的な環境を設定し、動作練習を提供]していた。これらはクライアントの<安全な日常生活の獲得を支援する>ために行われており、クライアントの状態によっては[目標設定を保留]ことを判断し、治療を継続しながら適切な目標を検討していた。

認知症の症状は多彩であり、認知症高齢者に対するケアは複雑な側面を持つとされる。日本において認知症に対する理学療法介入は必ずしも一般的ではなく、認知症高齢者のニーズに対処するための情報が十分共有されるまでには至っていない。本研究の成果は認知症高齢者に対して理学療法を提供する時の一助となり、認知症高齢者の生活機能維持とその介護者の支援に役立つと考える。今後は、抽出した概念が認知機能に関係なく認知症高齢者に当てはまる関わりであるのかを検討し、理学療法の初学者や介護者が利用できるようなツール作成を目指したい。

本研究の成果論文を投稿中である(Yokogawa M, Taniguchi Y, Yoneda Y: Physical therapy processes—interactions between a physical therapist and an older client with dementia)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 横川正美、谷口好美、米田由美
2. 発表標題 理学療法士による認知症高齢者の身体活動に対する誘導方法
3. 学会等名 第8回認知症予防学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横川正美、谷口好美、米田由美
2. 発表標題 認知症高齢者に対する理学療法士の関わり
3. 学会等名 第5回精神・心理領域理学療法部門研究会(新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yokogawa M, Notoya M, Toyama M, Takemura K, Goto Y
2. 発表標題 Upper limb movement used for memory recall testing to screen for cognitive function: A feasibility study
3. 学会等名 World Confederation for Physical Therapy (WCPT) 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yokogawa M, Taniguchi Y, Yoneda Y
2. 発表標題 Interactions between a physical therapist and an older client with dementia
3. 学会等名 International Psychogeriatric Association (IPA) Congress 2020 (発表予定) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	谷口 好美  (Taniguchi Yoshimi)  (50280988)	金沢大学・保健学系・准教授    (13301)	